発表 1

根津美術館の新創事業と現在の活動

野口 剛

根津美術館 学芸課長

略歴

東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了。京都文化博物館を経て、2008年より根津美術館に勤務、2016年から現職。企画担当した展覧会として「京の絵師は百花繚乱―『平安人物志』にみる江戸時代の京都画壇」（1998年）、「近世京都の狩野派展」（2004年）、「源氏物語千年紀展」（2008年）、「燕子花と紅白梅―光琳デザインの秘密」（2015年）、「円山応挙―「写生」を超えて」（2016年）などがある。

発表内容

根津美術館は、東武鉄道の社長などを務めた実業家・初代根津嘉一郎（1860 ～ 1940）が蒐集した日本・東洋の古美術品コレクションを保存し、展示するために作られた美術館である。初代嘉一郎は、アメリカ視察などの体験から、コレクションを公開することを願っていた。美術館は、初代嘉一郎の遺志を継いだ息子・二代根津嘉一郎（1913 ～ 2002）が財団を創立、昭和16年（1941）に開館した。第二次世界大戦末期の空襲で展示室として使っていた根津邸は大部分焼失したものの、終戦翌年には仮の展示棟で展覧会を再開した二代嘉一郎は、昭和29年（1954）念願の展示棟を建設する。下って平成2年（1990）、財団創立50周年記念事業として新しい展示棟が作られた。古い展示棟にも改修を加えて新しい展示棟とひと続きにして、以来、根津美術館は新旧2つの展示棟を使って活動を行ってきた。

根津美術館は、平成21年（2009）10月にさらに新しい展示棟を作り、新創開館した。現在の根津美術館である。前回の展示棟建設から20年も経たないタイミングでの新創事業の発端は、戦前から使われていた古い蔵が、作品の収蔵施設として不適切なことにあった。平成12年（2000）館長に就任した根津公一のもと発足した「根津美術館将来構想検討会」は、収蔵施設が抱える問題をはじめ、美術館の現状を確認したうえで、そこにどのような改善を施し、将来いかにあるべきかを検討するものであった。蔵だけでなく既存の展示棟も問題をはらんでおり、検討の結果、それらを一挙に解決する方法として、既存の展示棟のうち新しい方を収蔵庫に作り替えるとともに、古い方は壊して、その場所に新規に展示施設を作ることが決断されたのである。

新創事業にあたって、美術館の基本理念の再確認も行われた。その理念とは、初代嘉一郎のコレクションを基本とする美術品はもとより、嘉一郎が美術館に寄付することを遺言した邸宅跡、広大な庭園を保存し、後世に継承すること、それらを多くの人々に快適に鑑賞してもらうこと、ひいてはそれらを世界に発信すること、とまとめることができる。

展示棟の設計・監理は、来る東京オリンピックに向けての新国立競技場の設計を行うことでも知られる隈研吾建築都市設計事務所、施工は清水建設が行った。また、展示ケースの設計・制作・施工はコクヨオフィスシステム、照明の設計と制作はキルトプランニングオフィス、さらに茶道具展示室内の茶室は東京心傳庵があたった。以前より庭園の施工と管理を行っている晴風苑は、新創事業はもちろん、その後の根津美術館の環境整備や維持にも大きな役割を果たすことになる。

平成16年（2004）から、館長ならびに学芸員、隈研吾建築都市設計事務所、清水建設のスタッフによる見学会や検討会が始まった。一緒に世界各地の美術館を見学することで、参加者全員が建築としての「理想の美術館」に対する共通認識をもつことから始めたのである。その共通認識は、次の三つに集約できるようである。

①根津美術館が誇る美術品と庭園を守りつつ、よりよく見せること

②建築が自己主張しないこと

③使い勝手がよく、メンテナンスが簡単であること

新しい展示棟は、まず、茶室の路地を参照した正門から続くアプローチによって、喧噪に満ちた都市から静かで落ち着いた美術館のモードへの切り換えが行われる。また玄関に入ると、ガラスを挟んで横に広がる庭園の景色が目に飛び込んでくる。美術館の導入部分で、東京という大都市に位置しながら緑豊かな庭園を有する利点が最大限に引き出されている。

展示室は全部で6つ。展示室はほぼすべての壁面が壁付きの展示ケースで覆われている（fig.1）。ケース外側上部のグレー塗装の金属パネル、透明度の高いガラス、木製の手摺、ケース内の明るいベージュのクロス。それらに加え、床面を覆う茶色のコルク材と、スリットの入った落ち着いたベージュの天井。このように一見極めてシンプルな展示室のデザイン、建築と一体化した展示ケースの設計が、作品に集中できる鑑賞空間、作品の展示効果をあげることを、新創開館後の展示を通じて実感している。小さな工芸品を展示する際に使用する、着脱可能でありながらケース上部の固定パネルと違和感無く連続する視野角調整パネルも秀逸である。

展示ケースや展示室の設計には、多大なエネルギーが費やされている。展示ケースの制作に関しては、「ケース会議」と称されるものが実に91回も行われた。学芸員と建築事務所、ケースメーカー、照明デザイナーの4者がそろい、2年弱にわたって行ったものである。図面やCGなどによる打合せに始まり、小さな模型による形状や各部の寸法に関する打合せ、さらに実物大の試作、いわゆるモックアップによっても打合せが重ねられた。内部に使うクロスの色や材質も、モックアップの段階での徹底的な議論の対象となった。もちろん、実作品を用いた照明の検討も行われた。照明実験は計8回行われたと記録されている。さらに、当然要求される「高い機能性」とともに、「使い勝手のよさ」も追求された。

展示ケースの照明は、LEDによるベース照明に、ハロゲン光源の光ファイバーによるスポット照明を組み合わせている。ほぼすべての展示照明をLEDで行う美術館は、新創開館当時、世界で初めてであった。LEDの改良は日進月歩で、現在は演色性がよく、かつ調光もしやすい器具が登場しているが、光の性質まで考慮して作り込まれた根津美術館の照明は、いまも美しい光を作品にあてている。

根津美術館の新創事業は、建築設計、ケースデザイン、照明開発など、様々な分野のプロフェッショナルが、美術館サイド、それは館長や学芸のみならず管理部門も含む美術館の全職員と、熱い議論や綿密な打合せを長期にわたって重ね、膨大な手間と労力をかけ、創意工夫を加え、実現したものであったといえよう。

しかし、展示ケースや照明が良ければ展示が充実するわけでは、もちろんない。最終的に必要なのは、マンパワーだと思われる。根津美術館では、新創開館を機に学芸スタッフの増員が行われた。具体的な数字としては、それ以前は常勤の学芸員が3名、非常勤が3名だったのに対して、新規採用と非常勤から常勤へのシフトチェンジによって、常勤学芸員が8名に増やされたのである。新創事業によって、物理的に展示スペースや展示室が増えたということもあるが、これを機に抜本的に美術館の要である展示活動を活性化させようとする意図によるものである。展示内容の向上、それこそ展示空間を更新する最終目標でなければならない。

新創事業にはさらに加えて、世界に向けての情報発信も目標に掲げられた。現在、根津美術館では、通常規模の入館者数の展覧会で20%前後が外国人で占められている。場所柄、各国の大使館が密集し、

外国人が多いこともあるが、外国語対応にも注力している。 外国語といってもまずは英語だが、展覧会によっては全作品に英語での解説が付けられることもある。 翻訳の作業過程も精緻だと思う。

さて、 このたびのシンポジウムの表題は「日本美術を見せる」。 展示室や展示ケースのリニューアルに関わるトピックをお話すべきなのだが、 7年前の新創事業は、 展示棟に限られるものではなかった。

17,000平米を超える広大な日本庭園は、 根津美術館にとって、 所蔵する美術品と、 展示棟を中心とする建築とともに「三位一体」と称されるほど重要な位置を占めている。 国宝「燕子花図屏風」が展示される時期には庭園のカキツバタも楽しめることを、 来館者は知っている。 季節による変化だけでなく、 昨年も新しい遊歩道を設置するなど、 バリアフリー化も含めた庭園の改修はいまも進んでいる。

庭園内に位置するNEZUCAFÉは、 人気のカフェとしてしばしばマスコミに登場する。 デザインは展示棟と統一感が計られている。 展示棟内に位置するミュージアムショップも好評である。 ショップ担当が中心となり、 学芸、 広報、 管理部門の職員も参加して、 魅力的な商品の開発が行われている。 カフェやミュージアムショップも、 根津美術館で過ごす時間の満足感を高めているといえ、 ひいては美術品の鑑賞を心地よいものしているといえるであろう。

新創開館後の7年間の活動は、 美術品を保存し、 それを多くの方々に快適に鑑賞いただき、 世界に発信するという、 新創事業にこめた目標の実践そのものであるといえる。 庭園やカフェ、 ミュージアムショップの整備も含めた新創事業が、 根津美術館の現在の活動を根本から支えているといって過言ではない。 新創事業が、 新しい展示棟、 展示室や展示ケースの完成という一点で終わらず、 その効果を持続させ、 発展させるための様々な活動によっていまもそれが実現されつつあることを強調して、 本発表の結びとしたい。

Presentation 1

The Rebuilding of the Nezu Museum and Current Activities

Mr. Takeshi Noguchi

Chief Curator, Nezu Museum, Japan

Profile

Takeshi Noguchi earned his MA at the Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo. He worked at the Museum of Kyoto before joining the Nezu Museum in 2008, where he became chief curator in 2016. He has curated "The Blooming of Hundreds of Flowers: Painters of Edo Period Kyoto" (1998), "Kanō-School and the Art World of the First Half of the 18th Century in Kyoto" (2004), "The Millennium of *The Tale of Genji*" (2008), "*Irises* and *Red and White Plum Blossoms*: Secret of Kōrin's Design" (2015) and "Maruyama Ōkyo: Opening Up New Terrain in Japanese Painting" (2016).

Presentation Summary

The Nezu Museum was built to safeguard and exhibit Japanese and East Asian artworks collected by Nezu Kaichirō Sr. (1860–1940), who was an industrialist and the president of Tobu Railway Co., Ltd. Because of his experiences, such as his visit to the United States, Nezu Kaichirō Sr. had a longing to display his collection to the public. The Nezu Museum Foundation was established by Nezu Kaichirō Jr. (1913–2002), who honored his father's wish and opened the Nezu Museum in 1941. The part of the Nezu family residence that had been used as a gallery was mostly burned down in an air raid toward the end of the Second World War. Kaichirō Jr., however, reopened the exhibition using a temporary exhibition hall in the year after the war ended. In 1954, Kaichirō Jr. was able to build the long-awaited exhibition hall. Later in 1990, a new exhibition hall was built in a project to commemorate the 50th anniversary of the Nezu Museum Foundation. The old exhibition hall was also renovated in order to connect it with the new exhibition hall. Since then the Nezu Museum held exhibitions using these two adjoining exhibition halls.

In October 2009, another new exhibition hall was built and the new Nezu Museum, as it is now, was reopened. The 2009 rebuilding project was started less than two decades after the 1990's construction because the old storehouse, which had been used since the prewar era, was inadequate for storing the museum's artworks. In 2000, the "Committee to Consider the Future of the Nezu Museum" was started under the leadership of Nezu Kōichi, who was appointed Director of the Museum. The purpose of this committee was to identify problems with the storehouse, survey the current state of the Museum, consider what improvements should be made, and decide the future direction of the Museum. The study revealed that there were also problems with exhibition halls, not just the storehouse. It was decided to resolve these matters all at once by turning the newer of the two existing exhibition halls into a storehouse, and building a new exhibition hall at the location of the older exhibition hall, which would be demolished.

The philosophy of the Nezu Museum was also reviewed for this project. The philosophy encompasses the goals of preserving the artworks of Kaichirō Sr. along with the remains of his residence and large garden, which he gifted to the Museum; passing them on to future generations; making it possible for

more people to appreciate the collection and the garden in a comfortable environment; and also sharing them with the world.

The companies that were involved in this project are as follows: design and supervision by Kengo Kuma and Associates (known for designing the new National Stadium for the upcoming 2020 Tokyo Olympics); construction by Shimizu Corporation; design, production, and installation of display cases by Kokuyo Office System Co., Ltd.; lighting design and production by Kilt Planning Office Inc.; and construction of a tearoom in the gallery for tea utensils by Tokyo Shinden'an. Furthermore, Seifuen, which has been engaged in landscaping and management of the museum gardens prior to the start of the new rebuilding project, played a major role in this project and will continue its work at the Museum.

From 2004, study tours and discussions began with the participation of the director and curators of the Nezu Museum, as well as the staff of Kengo Kuma and Associates, and Shimizu Corporation. By visiting museums throughout the world, these participants established common viewpoints regarding the architecture of an "ideal museum." To summarize, this architecture (1) allows for the collection and the garden, which are the pride of the Nezu Museum, to be protected and shown in even better ways, (2) does not draw too much attention to itself, and (3) is convenient and comfortable to use with little need for maintenance.

The approach from the main gate, constructed like a *roji* (traditional narrow path to a teahouse), enables visitors to switch from the bustling city mindset to the quiet and relaxed ambience of the museum. As the visitors step inside the entrance, they can immediately catch a view of the garden landscape that spreads out beyond the glass walls of the building. This design takes full advantage of the Museum having a lush, green garden in the middle of Tokyo.

Almost all of the walls in the six galleries are lined with display cases (fig.1). The outside upper portion of the display cases consists of grey-painted metal panels. The cases have high-transparency glass and wooden handrails, and the walls of the cases are covered with light beige fabric. Furthermore, the galleries have brown cork flooring and understated grooved ceilings made of beige panels. As described above, the galleries appear to have a very simple design and the display cases are seamlessly integrated with the architecture. At the exhibitions held after the reopening, the museum staff felt that the new galleries and display cases are contributing to improving the viewing environment, which now allows one to focus on the art and enhances its visual impact. Another example of the superb design are panels that can be attached to the tops of the cases to make them appear smaller. These are used when small works of decorative art are displayed and they blend seamlessly with the wall panels above the cases.

A significant effort was made in designing the galleries and display cases. Ninety-one meetings were held for the production of the display cases alone. All four parties, including the curators of the Nezu Museum, the staff of Kengo Kuma and Associates, the display case manufacturer, and the lighting designer participated in these meetings for a period of nearly two years. The meetings began with drawings and computer graphics and continued with discussions about the shapes and dimensions of each part using miniature models and then with full-scale mock-ups of the display cases. Even the color and material of the wall fabric used inside the display cases were subject to thorough discussions during the mock-up phase. For obvious reasons, the study of the display case lighting was conducted using the actual artworks to be displayed. According to our records, lighting experiments were conducted eight times. In addition to high functionality, which is crucial to the lighting of the display cases, the meetings were directed at achieving easy-to-use lighting and cases that are simple to open and close.

Consequently, it was decided to adopt a combination of LED lights for the base lighting and fiber optic halogen spotlights for the lighting in the display cases. The Nezu Museum was one of the first museums in the world to use LEDs for almost all display lighting when it was reopened in 2009. As LED technology continues to improve rapidly, lighting fixtures with high color rendering properties and simple light dimming features have become available on the market. The lighting of the Nezu Museum, however, was devised by factoring in various aspects such as the properties of lights. As a result, the lighting illuminates the artworks beautifully even today.

The rebuilding project of the Nezu Museum was accomplished after professionals from various fields, such as architectural design, display case design, lighting, along with Museum staff, including the director, curators, and administrative staff, conducted thorough discussions and meetings, incorporating innovative ideas.

Of course, high-quality display cases and lighting alone do not guarantee a successful exhibition. Overall, human resources are likely to be the most important factor for an ideal exhibition. When the Nezu Museum was reopened, it employed an additional number of curators. More specifically, there were three full-time and three part-time curators prior to the reopening. The Museum hired new personnel and the original part-time curators changed to a full-time work schedule. There were a total of eight full-time curators. One of the main reasons for this increase in human resources was the increase in exhibition space due to the rebuilding project. Another reason is the Museum's intention to carry out exhibition activities, which are pivotal to a museum. The ultimate goal for the renovation of exhibition spaces must be the improvement of exhibition content.

Sharing information with a global audience is also included in our philosophy. At present, foreigners make up about 20% of all visitors who come to the regular exhibition at the Nezu Museum. The Museum is located in an area with a sizeable number of embassies and foreign residents and is therefore making an effort to provide foreign language support. The foreign language service currently provided at the Museum is restricted to English. For some exhibitions, descriptions of all artworks are provided in English. The process of translating Japanese descriptions into English must remain our firm commitment.

As you know, the title of this symposium is "Exhibiting Japan: Renewal and Renovation of Japanese Art Galleries." Therefore, I should discuss topics related to the renewal and renovation of the exhibition halls and display cases. The rebuilding project conducted seven years ago, however, was not limited to the exhibition halls.

The vast, 17,000 square meter Japanese garden is of great significance to the Nezu Museum. The garden is viewed as an inseparable part of the Museum, together with the collection and the renewed architecture. Visitors to the Museum know that they will be able to view real irises in the garden when our National Treasure depicting these flowers is exhibited. Besides seasonal changes, renovation of the garden including a project to make the garden free of barriers is ongoing. For example, a new path was laid out in the garden last year.

The NEZUCAFÉ, located in the garden, is often featured in the media as a popular coffee shop and was designed to complement the new architecture. The Museum Shop in the exhibition hall is also very popular. The attractive products on sale are created by the curators and public relations and administrative personnel under the leadership of the head of the shop, who is at the core of this endeavor. The NEZUCAFÉ and Museum Shop not only help in improving the quality of the time that visitors spend at the Nezu Museum, but they also make browsing through the collection a more pleasurable experience.

The activities over the last seven years after reopening the Museum consisted of implementing the objectives set up for the rebuilding project. The rebuilding project, which included a renovation of the garden, NEZUCAFÉ, and Museum Shop, has provided a solid foundation for the current activities of the Nezu Museum. I wish to end by emphasizing that the project did not end when the new exhibition, galleries, and display cases were created, but is still a work in progress, with various steps being taken to make further improvements.

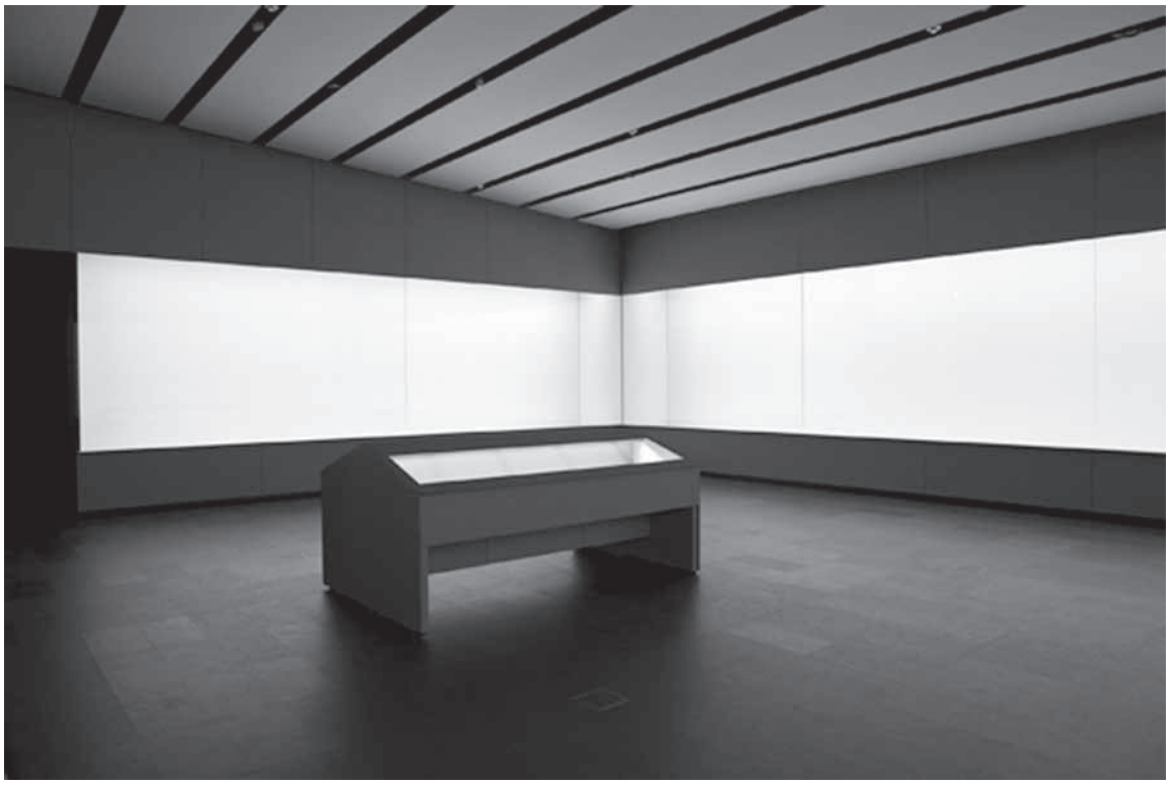

Fig. 1